Turgot の経済思想形成と Montesquieu

津　田　内　匠

I　重農学派の成立にかんしては多くの社会経済史的要因や社会経済思想史的影響関係が指摘されうるが，Montesquieu は一般的かつ基本的な意味で主要な影響者の1人である。一般的かつ基本的にというのは，たとえば重農学派にとって重商主義的色彩の濃い経済論をしかも断片的に示した Montesquieu は決して Boisguilbert や Cantillon のように経済理論面での直接先駆者たりえず，また歴史を排除する重農学派にとって Montesquieu の歴史的考察はなんら注目に値しなかったように，個々の論点や方法については Montesquieu はむしろ重農学派の批判の対象でしかなかったし，とくに社会諸関係の中核を法制に求め，経済に対する政治の優位を示した Montesquieu に対して重農学派は激しい対立さえ示したが，こんにち異論の余地なく社会科学の古典と認められる『法の精神』の著者の体系が科学としての経済学＝重農主義の成立に与えた影響こそは測り知れぬものがあろうからである。重農学派自身あるいは敵対者さえも，Montesquieu の体系ないしは問題提起が重農学派の問題認識ないしは体系の準備にいかに貢献したかを認めている[1]。両者の体系の構造的な連関を詳細に検討することは重農主義分析の1つの課題であろうと思われる。

小論の目的は，以上の課題を背景とし，そのごく一部を限って Turgot の初期諸著作を Montesquieu の体系の光りのもとに照しだし，Turgot がかれ自身の経済思想形成の端初においていかに Montesquieu の体系を批判し摂取したかを検討し，あわせて以上の課題への接近を多少とも試みようとすることにある。

私見によれば，Turgot の初期諸著作(1748–59)[2]はその思想発展の上からほぼ中間の 1753/4 年の前後に区分されうる。多少の図式化を許されるならば，前半(1748-53/4)は主として Montesquieu の問題提起をうけて言語論・認識論・歴史論から普遍史・政治地理学の構想にいたる時期であり，後半(1753/4–59)は主として Gournay の影響下に現実の経済政策論的観点からこの政治地理学の構想をやがて Quesnay の影響下に理論的に確立する Turgot 独自の政治経済学へと接近せしめる時期であるといえよう。ところで小論の範囲は前半にある。初期前半の Turgot が一般に Montesquieu との関係で論じられるのは，風土論批判と貨幣論である。しかし Turgot 自身が論及しているのは前者だけであり，このため両者の関係は一見希薄なものと考えられてきた。しかしこの両者の関係には，重農学派が排除し，Turgot が自らの経済学の方法的基礎とした歴史認識の問題と，Turgot がこの歴史認識に支えられながら Montesquieu の問題提起と対抗的に展開したと考えられる政治地理学の構想とが，風土論批判を媒介としてふくまれている。小論の問題はおのづから 1，歴史認識の問題，2，政治地理学の構想の2つの問題に集約されうるであろう。

II　Turgot の風土論批判は『法の精神』刊行の 1748 年の断片以後，この時期の多くの断片にみられる[3]。その要点は 1. 風土決定論者 abbé Dubos とその「多少緩和された」Montesquieu の主張をともに決定論とみること，2.「少なくとも精神的原因がない場合にだけこれら自然的原因に頼るべきである」として「自然的原因」そのものの否定ではないが，諸国民の精神形成におけるその直接的影響を否定し「精神的原因」を重視することである。「精神的原因」とは「諸々の動機あるいは判断力としての魂に影響を与え我々に一定の慣習をつけさせうる・いっさいの環境」つまり「政体の本性，政治上の諸変革，民衆の富裕または貧困，隣接諸国民とその国民の位置の関係その他同様の環境」であり，「自然的原因」とは「空気や気候の質」であり[4]，Turgot の批判点はつまりは自然条件に対する社会的条件の重視である。したがって Dubos に対してはともかく，決定論としての Turgot の Montesquieu 批判は不当であった。たしかに Montesquieu は早くから風土論を示し[5]，とくに『法の精神』

1)　G. Weulersse, *Le mouvement physiocratique en France de 1756 à 1770*, Paris, 1910, Tom. I, p. 24.

2)　「Turgot の経済思想についての1考察」『経済研究』9巻4号；『チュルゴ経済学著作集』1962年，「解説」；渡辺恭彦「Turgot の歴史意識の構造と論理」『一橋研究』4号，参照。

3)　Recherches sur les causes des progrès et de la décadence des sciences et des arts, (Fragment), 1748, *Oeuvres*, Tom. 1, p. 140 ; Plan d'un ouvrage sur la Géographie politique, 1751, *ibid.*, p. 262 ; Plan de deux Discours sur l'Histoire universelle, vers 1751, *ibid.*, p. 304.

では解剖学的・生理学的・心理学的・比較病理学的分析まで試みて，北方・南方・気候温和地方諸民族の諸傾向を対比し，さらにアジアとヨーロッパを対比しつつ奴隷制・家族関係・宗教・政治・経済等あらゆる問題を風土論的に論じた(*Liv.* XIV–XVIII)。しかしその意図は「多数の事物が人間を支配する。気候・宗教・法律・政治の格律・過去の事例・習俗・生活様式。これらのものから結果として一般精神が形成される」(*Liv.* XIX, ch. IV)こと，そしてこれら多様な原因のうち「精神的原因は自然的原因よりも多く国民の一般性格を形成しその精神の特質をきめる」[6] ことを示すにあった。こうしてみると Montesquieu は Dubos の風土決定論を「多少緩和した」のではなく，むしろ Dubos の自然条件と社会条件の相対的比重を全く転換して自然条件の副次的役割を正しく規定し[7]「風土論をはじめて科学的に示し」[8] たというべきである。

しかし Montesquieu の風土論は「絶対的法則の存在と厳密な決定論を信ずる Newton の世紀の傾向」[9] を背景に当時一般にはむしろ決定論として肯定されていた[10]。とすれば Turgot の Montesquieu 批判はまた別の観点から検討されねばならない。批判の当否そのものの問題ではなく，両者の「精神的原因」の作用のしかた，つまりこの決定論批判の基底にある Turgot の歴史意識ないしは改革の展望と，決定論と目された Montesquieu のそれらとの関係の検討が問題となる。

Montesquieu がその体系形成の過程で意図した実践的課題は貴族共和制的立場からする絶対王制批判であり，時間と空間における相対化の方法は無限と絶対の観念を排除して絶対王制の存立理由を否定しさろうとする・かれの実践的意欲をになうものであった。Montesquieu の歴史意識は終始この現状批判の実践的意図とその立場を反映している。すなわちかれは『ペルシャ人の手紙』でフランス絶対王制の現状と東洋専制主義の酷似を諷刺し，この君主制から専制への転落の原因を政体の興隆と衰退の原因という一般的な問題に移してその歴史的考察を試み，つぎに『ローマ史論』では以上の問題意識を，かれがヨーロッパの自由の伝統を求める古代ローマ共和制に移し，その共和制から専制への衰退過程を市民精神の衰退，政体の形式と実質の背離の過程として析出し，これを『法の精神』で政体の本性と原理の関係に一般化した。政体の本性とは政体の構造・主権のあり方であり，政体の原理とは「政体を活動せしめる人間の情念」(*Liv.* III, ch. I)つまり共和政体の徳性，君主政体の名誉，専制政体の恐怖であり，とくにかれは共和制的徳性＝市民精神の把握によって現状批判の原理を確立した。こうしてかれは現状批判の方法としての歴史分析によって現状批判の原理としての共和制的徳性を導きだすことができた。かれによれば，歴史はこの政体の本性と原理の相関関係として進む[11]。つまり進歩は政体の本性と原理の完全な適合へ向う過程で実現し，衰退は原理の腐敗，本性からの背離によって生じる。しかもすべての政体は興隆と同時に衰退の過程を内包する。したがって Montesquieu の眼には歴史は主として没落にいたる国政の偏差の表現として映るのである[12]。要するに Montesquieu は歴史を興隆と衰退を必然的な1過程とする総体において把握し，立法者や個人の意志をこえたもの，個々の国民の「一般精神」に合致するものとして認識した。歴史が合致する一般精神とはなにか。それは「何世紀もの間増大され結合される一連の無限の諸原因の結果」[13] であり，政体の原理を発動せしめるため個々の国民を基本的に規制する一般条件である。立法者の恣意的判断で「一般精神を覆すのは，個々の制度を覆す以上に危険である」(*Liv.* XIX, ch. XII)。したがって立法者は自然的原因の弊害に抵抗することを下限とし「政体の原理に反しない限り国民精神に従う」(*Liv.* XIX, ch. V)ことを上限とする役割をもつ。このように一般精神は絶対君主制の専制化を批判し阻止しようとする Montesquieu の実践的意図の体系的表現の1つであり，かれの歴史意識がそれを支えている。かれに歴史意識の欠如をみるのは誤

4) Turgot, Fragments, vers 1751, *ibid.*, p. 338.

5) cf. *Lettres persanes*, 1721, Lettre CXXI ; *Considérations sur les causes de la grandeur des Romains et de leurs décadences*, 1734, ch. v.

6) Montesquieu, Essai sur les causes qui peuvent affecter les esprit et les caractères. *Oeuvres* (éd. Masson), Tom. III, p. 421.

7) Vyverberg, H., *Historical pessimism in the French enlightenment*, 1958, p. 154.

8), 9) Merquiol, A., "Montesquieu et la Géographie politique". *Revue internationale d'Histoire politique et constitutionelle*, 1957.

10) Shackleton, R., *Montesquieu, a critical biography*, 1961, p. 302.

11) cf. Althusser, L., *Montesquieu, la politique et l'histoire*, 1959, ch. III.

12) cf. Hubert, R., "La notion du devenir historique dans la philosophie de Montesquieu", *Revue de Métaphysique et de Morale*, 1939.

13) Montesquieu, De la politique, *Oeuvres*, Tom. III, p. 169.

りであり，また世界史的規模での進歩の観念を求めるのも誤りである。かれの歴史認識は，それがかれの実践的意図を反映すればするほど閉鎖的・多元的・非連続的であり，全体としてペシミスムにおおわれている。かれは環境決定論者ではない。しかしかれが実践的意欲をになって多様な諸原因の複雑かつ厳密な相互規制性を主張すればするほど，かれは楽観的な全体的改革の展望を持ちえないのである。Turgot の Montesquieu 批判の主意はこの点にかかっているであろう。

III Montesquieu と異なり Turgot の実践的志向は絶対王制の否定ではなく，ブルジョワジーの成長を背景とする絶対王制の啓蒙化にあった。したがって Turgot にとっての基本課題は Montesquieu が現状批判＝体系形成のすぐれた方法とした相対主義に新らたな統一の契機を与え，決定論的な精神風土に新らたな主体的契機を与えることであった。かれの歴史意識の形成はこの課題の展開にそってなされる。1748 年かれは断片『学問と技芸の進歩と衰退の諸原因にかんする研究』で Montesquieu の風土論を決定論として批判し同時にこの決定論に対抗する・かれ自身の進歩の歴史観のいわば原型を断片的に示した。その要点は以下の 3 つの原型にある。**第 1 原型**，かれは学問・技芸の進歩の条件を「民衆の言語の状態」と「政治機構」と「天才の偶然」に帰し，その相互作用を進歩と理解した。第 1・第 2 の条件は風土論批判で示された「精神的原因」＝社会的条件であり，第 3 は主体的条件である。かれによれば言語と政治の完成に天才は不可欠であるが，その天才の出現はまた「教育の偶然」と「環境の偶然」＝社会的条件としての第 1・第 2 の条件に規定される。この場合「天才の偶然」とは，天才への期待と同時に天才それ自体を偶然とみて歴史の主体＝進歩の担い手としての人間一般の能力，「民衆の天才」[14] への期待を意味する。そして「偶然は時代とともに増大する」のである。Montesquieu の体系では個人は副次的役割をもち，génie はむしろ「一般精神」を意味し，偶然は排除さるべき観念であった。Turgot は，既制の必然的とされる社会的諸関係を排除し「偶然性を偶然性として産出し展開する[15]」ブルジョワジーの登場を背景に生活諸条件の偶然性を強調することによって，いわば Montesquieu の多様の原因の厳密な相互規制性の悲観的な認識を進歩の条件の相互作用として楽観的な認識へと主体的に転換したのである。**第 2 原型**，かれは言語を人間精神の進歩の「尺度」と考え，言語研究を「一種の実験形而上学[16]」と呼ぶのだが，かれは「民衆の言語の状態」の考察をとおして言語は他言語との融合(mélange)によって完成するという原則を把握した。Montesquieu の体系では融合は副次的役割をもつにすぎない。**第 3 原型**，かれは「自然の利用」としての技術が人間の欲望に支えられ商業対象となることによって継続的に進歩すると考え，技術と商業の結合を重視した。以上の諸点からだけでも Turgot はすでにこの断片で Montesquieu の風土論と対抗的に融合・継続・完成という進歩の歴史観の基本を示し，進歩の経済的要因に着目したことが知られる。そしてこれらのいわば個別的に摘出された進歩の諸原型は『人間精神の継続的進歩の哲学的展望』(1750 年)で相互連関的・統一的に構成され，理性を統一原理として時間的空間的視野の拡大＝人類の連帯性の発見をめざす普遍史の構想(『普遍史にかんする 2 つの講演プラン』(1751 年ごろ)へと高められ，その進歩の歴史観の特徴はさきの断片での特徴に統一の要素を加え融合・継続・統一・完成として，いわば Montesquieu の閉鎖的・多元的・非連続的な歴史観の対極において完成される。すなわち以上の諸原型の相互連関的展開とその統一的把握こそがかれの普遍史の構想であり，かれの歴史認識の総体である。それは概念的には以下の 4 点に要約できる。1. さきの断片の第 1 原型では学問・技芸の進歩は「民衆の言語の状態」と「政治機構」と「天才の偶然」の **3 条件**の相互作用と理解されたが，普遍史の展開はさらに進んで **3 原型**の相関関係と理解される。2. 言語→他言語との接触・融合→完成の第 2 原型と技術→商業との結合・継続的進歩→完成の第 3 原型の相関関係から普遍史における客体の発展形態があきらかになる。すなわち技術＝「自然の利用」はたえず「自然のヴェールをはぎ」，言語と文字は「すべての時代の蓄積された生産・見識・経験・発見」を後世に伝え，技術と商業の結合によって技術は継続的に進歩し商業はたえず「諸国民のヴェールをはぐ」。また諸言語の接触・融合は諸国民のそれの結果にほかならない。蛮族による文明民族の征服という形での諸国民の接触・融合は，蛮族に文明民族の言語・風俗・法律・技術を伝え，文明民族とともに 1 つの民族となることを蛮族にせまる。こうして諸帝国が興隆し衰退し，諸政体が続出し，技術と学問が完成し，たえず「知られ

14) Turgot, Plan inachevé de Discours sur les progrès et la décadence des sciences et des arts, vers 1751, *Oeuvres*, Tom. 1, p. 341.

15) Marx, K., Deutsche Ideologie, *Marx Engels Werke*, 3, S. 76.

16) Turgot, Réflexions sur les langues, vers 1751, *Oeuvres*, Tom. 1, p. 347.

る世界，つまり商業世界と政治世界が…拡大され」，「商業と政治とが地球の全部分を結ぶ」。3. このように言語・技術・商業・政治が融合と継続をとおして普遍史的時間空間を媒介し，経済と政治が歴史進歩の客体をなす。これに対して，さきの断片では学問・技芸の進歩の主体は「天才」→「民衆の天才」であったが，ここでは普遍史の原理にもとづき普遍史展開の主体は人間一般の「理性と情熱と自由」である。4. Turgot は，歴史はこのような主体と客体＝「精神的原因」の相互作用であり，融合と継続の理性による統一であると考える。すなわち，「歴史とは」，「一般的かつ必然的諸原因の影響，特殊的諸原因の影響と偉大なる人間の自由な行動の影響，および以上の全部と人間の構成体との関係をあきらかにすること，精神的諸原因の原動力と機構とをその諸結果によって示すこと」である。そこでかれは『普遍史にかんする２ツの講演プラン』を『諸政体の形成と諸国民の融合にかんする第１講演』と『人間理性の進歩にかんする第２講演』とによって構成し，また「歴史は時間と場所のへだたりを測定する地理学と年代記とにもとづく」と考えるのである。

Turgot の歴史認識の構造的特徴は以上である。これを Montesquieu の場合と比較すれば，歴史の主体と客体の把握に両者の基本的差異をみることができる。前者は歴史の客体を経済と政治，とくに経済とみ，後者は各政体の本性＝国家機構とみる。また前者は歴史の主体を「民衆の天才」の「理性・情熱・自由」とみ，後者は各政体の原理＝「一般精神」にもとづく「情念」とみる。Montesquieu は経済や技術を無視したわけではない。しかしかれの体系ではそれらは各政体の本性に基本的に規制され，技術と経済の結合はなく，歴史の客体的動因とはなりえない。Turgot が Montesquieu の静態的歴史認識を動態的なそれに転換しえたのは，Turgot が問題を Montesquieu の各政体構造の考察から人間精神の進歩の考察に移したから[17]ではなく，Turgot が歴史の客体的動因としての経済を人間一般の理性という普遍的原理によって主体的に把握したからである。したがって Turgot は歴史認識の問題として自己の歴史観を Montesquieu と対抗的に提示したが，個々の点では Montesquieu の体系から多くのものを受けいれた。たとえば狩猟・牧畜・農耕の生活様式の諸型態，１夫多妻制＝専制政体・１夫１婦制＝共和政体，小國＝共和政体・大國＝専制政体の対応関係がそれである。Turgot はこれらを Montesquieu のように法との相対関係として静態的にではなく，その経済構造との対応関係において動態的に考察しようとする。これが Turgot の普遍史の基本的特徴である。普遍史の試みはすべて，支配的階級の特殊利害をそれぞれの原理にもとづいて普遍化しようとする・あきらかな階級的性格をもつ。Turgot のそれは，階級を形成してまさに世界市場を望見せんとするブルジョワジーのそれの代表的表現である。

IV　1751 年 Turgot は上述の『普遍史』の構想と平行して政治地理学 (la géographie politique) の構想(『政治地理学にかんする著述プラン』) をもった。すでに紙数がつきたので内容の詳細にははいれない。ここでは前節の問題との関係で，その問題点を指摘するだけにとどめる。Turgot の政治地理学の構想は，かれの全体の構想のなかでは，(1)「合理的普遍史」，(2)「その結果としての政治地理学」，(3)「私が政治地理学の理論と名づけるものをふくむ政治論」という関係にあり，政治地理学は「あえていえば歴史の断面図」である。この政治地理学は「理論地理学」と「歴史地理学」とにかかわる。前者は「政治技術の自然地理学との関係」つまり全構想の関係でいえば (2) 政治地理学の (3) 政治論の側面であり，後者は (2) の (1) 普遍史の側面である。政治地理学とは政治論と地理学のたんなる結合ではなく，(1) と (3) とを綜括する全構想中の中心的分野をなす。これを Turgot の歴史認識の構造的特徴にひきもどしていえば，政治地理学の基本課題は，歴史の客体的動因として把握された経済の動態を各時代の「歴史の断面図」のなかであきらかにすることである。その場合かれは「政治技術」は「部分」であり経済の動態把握こそが「全部」であると考える。つまり「その部分がどんなに主要であっても，部分のもとに全体を示すよりは，全体のなかで部分を示す」べきである。Montesquieu は歴史の客体を政体の本性に求め，Turgot はそれを経済に求めた。Montesquieu の静態的歴史認識を Turgot の動態的歴史認識へと転換せしめた要因はそこにあった。Turgot が政治地理学を「合理的普遍史」の「結果」として位置づけるのは，この意味であり，またこの意味で政治地理学の構想は，Turgot が風土論批判を媒介として Montesquieu の歴史認識に対抗的に提示した進歩の歴史認識，この歴史認識に支えられてかれが Montesquieu の『法の精神』の体系に対抗的に提示した・かれの体系の全構想中，最も主要な部分をなすはずであったと考えられる。この政治地理学の構想はやがて Gournay, Quesnay の影響下に政治経済学へと高められるのである。

---

17)　cf. Hubert, R., *op. cit.*, p. 610.